

優秀賞

# 犬をかこうとらこじと

東京都港区立白金小学校二年 渡邊 魁

ぼくは、夏休みに「どうして？」という本を読んだ。そして、ぼくは、ないた。はなのつけねのあたりがツーンといたくなって、むねのまん中のあたりがギューッとしばらくするようにいたくなつた。

かいぬしの「あなた」は、かい犬の「わたし」をシエルターにあずけ、そのまま「わたし」はあん楽しさせられた。この本は、「わたし」から「あなた」への「どうして？」というといかけみたいになっている。

「あなた」は「わたし」をさいしょはすごくかわいがっていた。でも、だんだん「わたし」をかうのがめんどうになり、シエルターにすててしまったのだ。

「どうして？」かわつたんですか。「あなた」にぼくは聞きたい。「わたし」はかわっていないのに。

あん楽しさせられる時、「わたし」は考えていただろう。「どうして？」ころされるのか、と。それでも、「あなた」をえいえんにまちつづけます、と言ってしんでいく。天国でもずっと「あなた」をまわっていることだろう。「わたし」はすてられ、ころされたのに、「あなた」をこれっぽっちもうらまさない。かいぬしは犬にとっておやと同じだからだ。

ぼくは、しらべてみた。二〇〇八年の犬のさつしよ分数はやく八まんとう。八まんとうが「どうして？」とかいぬしにといかけている。そんなにしよ分されているとは知らなかった。なんてことだ。

ぼくのいえにも犬がいる。ほごセンターでしよ分されるはずだった犬を春にひき

とつた。まだ子犬でとてもかわいくてかしい子だ。外からかえってくるとしっぽをブンブンふり回して出むかえてくれる。すわっている、ひぎにあたまをのせてあまえてくる。この子の場合にはんにん・きよせいせずつかかってふえすぎ、ほけんじよからしどうが入つたそうだ。

犬をかうということは、かぞくがふえることだ。ぼくは、犬のために自分ががまんすることがふえた。さん歩やおしこのしよりをしていると、友だちとあそんだり、テレビを見たりする時間がへる。正直言つて、ちよつとめんどうくさいがつらくはない。犬はぼくにたよりきつていからだ。ことばは話せないけれど、じつと見つめてうつたえてくる。だからやってあげなきやと思う。

犬はおせわしないと生きていけない。赤ちゃんといっしよだと思ふ。かいきれないから、年をとつたから、びよう気だからといつてすてるのは、ひどいしぎんこくだ。かいぬしがかつてすぎると思ふ。

もし犬をかうならさいごまでかつてほしい。犬はかつた時からかぞくの一員だ。かぞくをすてるのはありえない。かぞくはしんでもかぞくだし、犬だつてそうだ。

そうして、「どうして？」とといかける犬がいなくなればいい、とぼくはねがっている。